第17回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第一七回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございました。おかげさまで二九九名の方から七三二篇の作品をご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、十一月七日、渡辺みえこ、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀賞・優秀賞を掲載させていただきますが、奨励賞作品も、次号以降できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。

授賞式は、残念ながらコロナウィルス流行の影響により今年も見送らせていただきます。賞状・賞品・賞金などは明年一月下旬までに直接受賞者に発送させていただきます。

第一八回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も同じ要領で募集を行ないます。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

第17回「文芸思潮」現代詩賞

最優秀賞

「きんじ、する」
「顔認証訴訟」
「飽食した蜘蛛と法悦」

ヨクト（神奈川県横浜市）

優秀賞

「ワラベ歌」「人のしまつ」
「時のかたまり」

中原賢治（岐阜県岐阜市）

「うむという」「昔日」
「くるまれているということ」

橘いずみ（島根県出雲市）

「終」「老」「死」

麻生ゆり（愛知県豊明市）

「オアシス」「火の見櫓」「クローク」

妻咲邦香（長野県北安曇郡）

奨励賞

「死の匂い」「虐待の記憶」　佐藤　裕（神奈川県横須賀市）
「入出力波形観測結果」　加藤光哉（北海道苫小牧市）
「観念豪雨警報」「フルグレインマッシバンバータ死神」
「純情キラーサイコビッチ」　岩尾宏紀（福岡県北九州市）
「地下坑道」「地下鉄のヘミングウェイ」「氾濫の後」
松本昂幸（東京都世田谷区）
「昇天」「熟れる日きよら」「風の惑星」
福永十津（埼玉県越谷市）
「美しく青く」「秋風」「夏の夜の夢」
一橋省吾（埼玉県さいたま市）
「また　青葉若葉の季節」「残り火が唄う」
「海と雨の間で」　遠藤芳子（東京都狛江市）
「雨音」「枯葉」「根」　薬師丸怜央（茨城県取手市）
「女の家」「田園」「骨の魚」　桐ヶ谷忍（東京都江戸川区）
「砂糖をまぶしながら」「殴る、蹴るの暴行」
「薬玉と赤飯」　野葛間（長野県上田市）
「動かない水」「チューリップ」「いのり」
中村郁恵（北海道札幌市）
「虹彩」「極彩色」　インバ（奈良県奈良市）

選評

詩への情熱

渡辺みえこ

第一七回文芸思潮現代詩賞の応募作品は、様々の個性があり、それぞれの形式の中での詩への情熱を感じた。エッセイや小説でなくなぜ詩か、という問いに、フランス二〇世紀前半の詩人ポール・ヴァレリーは有名な言葉を残している。「散文は歩行、詩は舞踏」と。さらに舞踏について「あらゆる酔いのなかで最も高貴な酔い」と書いている。選ばれた研ぎ澄まされた短い言葉の中に身体的リズムや拍動、押し殺した叫び、想念……などが包含され、詩情を通して著者と読者が共有できる場が作られる。

最優秀賞のヨクトは、現在ほとんど世界中の人々が見舞われている電脳空間に生きる〈私〉の緊張感を形式も含めて表わし、スピード感と危うさが、その実感を伝えている。

近代詩では、様々な実験がなされてきた。一九二〇年代のアヴァンギャルドは過去の規範に反抗する芸術表現として、未来派、アナーキズム的なダダ、表現派、視覚派……等、音楽、美術、舞踏、演劇、また書道、華道なども含めた総合的抵抗運動だった。さらに一九六〇年代には、視覚詩、音響詩やパフォーマンスなどのインターメディアアートも行われ、芸術による体制変革の契機も作った。前衛作品の実験は、時代の危機状況の中でなされ、それは時代に対峙しながら新しい形を創っていき、その後の芸術形式も変えていった。詩は言語芸術として出発しているので、自己と世界との関係を言語で見つめて深化させていくことによってそのフォルムが作りだされるのだろう。

八連目の「いつへ」は、いつという指示代名詞につながる言葉に、例えば、やってくるのか、なくなったのか……などとつながる言葉にすると流れがスムーズになる。

優秀賞の妻咲邦香「火の見櫓」は、異質な種類の言葉の結合が、その裏に隠されている多くの言葉も含んで、新鮮で強い思いが伝わってくる。最終連のイメージにもっていくには前の連に伏線を入れるとスムーズにつながる。「オアシス」は出だしが甘い。「クローク」は「待って　行かないで」が情緒的、生まで浮いてしまうので言葉の流れ、調和に一考を。

橘いずみ「うむという」は、産むこと、産まれることが重なり、身体経験の人知を超えた事柄を「つまらなさ」「眩しい」などという相反する言い方で迫ろうとしている。この主題は、続けてもっと書けるのではないか。

麻生ゆり「終」「老」「死」は、書きたいことがたくさん押し寄せてきて、幾重にも屈折した言語が詰まっている。そのぶつかり合いは新鮮だが、一行の飛躍が多すぎて読者はイメージを掴みにくい。一編で何編かの詩ができると思う。もう少し緩やかに言葉を運んで三連目ほどでイメージの山が来るとよい。

中原賢治の「人のしまつ」は、豊かな感情移入で「あなた」の経験に寄り添って、危機感と悲しみが迫ってくる。「この子の命あるところまで」は、命ある限りという意味がもう少し簡潔に伝わる言葉を。「ワラベ歌」は「若草の匂いがする黒髪の」というような常套句には気を付けたい。

絵画では長い間石膏デッサンの基本訓練をして、物を自分の目で見ることができるようになってから、その観察描写を超えて創作していく。そうすれば概念的、観念的になりにくい。物は空間によって、光の当たり方などが変化する。そこにいるその女性をよく見れば、もっとその人だけが持つ「髪」が見えるのではないか。

奨励賞の中村郁恵「動かない水」は、水の一滴をよく観察描写している。水との対話によって、二連では、言葉に表出しきれない己が内なる声を象徴して巧みだ。「チューリップ」は、花の観察に人間生活への比喩の移行が滑らかになるために、もう少し詩行が必要だろう。「長さの違う人差し指が2本」が唐突でイメージしにくい。

加藤光哉「入出力波形観測結果」は、人がすでにサイバーテクノロジーに身を任せてしまっている危うさが伝わってくる。

十九世紀、ゴシック小説に、自分が生み出したものが自分を破壊する怪物だったという物語がある。イギリス人メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』である。もう後戻りはできないと思われているサイバーテクノロジーが、人を豊かにするものか、破壊に向かうものかは、今後もみつめていってほしい。

松本昂幸「地下坑道」は、人間の心の底に眠る暴力、悪への問いを「地下坑道」の描写から始めたのは良い。

村上春樹の『アンダーグラウンド』は、地下鉄サリン事件での、被害者へのインタビューが元になっているのだが、東京の地下、人間の深層意識の暗闇（村上の言葉ではヤミクロ）が、恐ろしいほどに重なった悲劇である。

「地下坑道」では、一連から四連までの坑道は物の描写で、即物的（ザッハリッヒ）で良い。その後の友よ、以下五連から八連までは、説明的で人道主義の類型になってしまっているので、個人的体験を書くなど少し工夫がほしい。「地下鉄のヘミングウェイ」も同様な設定で強い詩行が展開されている。ヘミングウェイに強く寄り添っているが、自分の経験として書いてもよいのではないか。

佐藤裕「虐待の記憶」は、存在の不安、痛みが様々の具体的な形で表わされている。一連目、上半身を切り取られたのだが、「何を喪失したのだろう」という不可知論的問

いはいい。五連目の「深い深い」、「遠い遠い」の繰り返しは、二語目が、弱くなるので違う言葉で言えないだろうか。

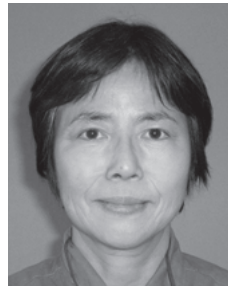
野葛間「砂糖をまぶしながら」は、男装文体、ブラックユーモアの物語詩として現実感がある。もう少し書き込んで長編の物語詩としての展開もできるのではないか。

遠藤芳子「また　青葉若葉の季節が」は「青葉若葉」が常識的だが、それを打ち破る反語が続き複雑さと深みを作っている。

薬師丸怜央「雨音」、「枯葉」、「根」は、ねじれた言語の組み合わせに、苦悩の状況が伝わってくる。感覚的言語が豊富で息詰まるような展開で読者を引っ張っていく。救いが見える箇所があってもいい。

インバ「極彩色」一行目は、梶井基次郎の『桜の樹の下には』を思わせるのでないほうがよい。二連目の外界描写から三連目の身体の中に入っていく転換は良い。四連目の「空虚を満たす漆喰の郷愁」などは観念的な比喩で中心がぼけてしまう。「虹彩」は、「描かなければ　描かなければならない」と追い詰めていく言葉の堆積は迫力があってよい。キリスト教の神に限定すると狭くなるので、一般的な信仰でもいいのではないか。

一橋省吾の「美しく青く」という言葉は、著者の大事な概念と思えるのだが、ナルシズム的陶酔を含んでいる。ポール・ヴァレリーの「舞踏」の「酔い」は、散文と対峙させているが、身体訓練の後の、他者（読み手）の視線の中に立ち、他者をも酔わせる言語文化であろう。「恨んだりしても　人のせいにはしない　美しい図式」というような言い方は、率直だが、道徳的説教に陥らないように抑えて、「記憶の骨格にちらばる脊髄が／窓からわずかに溶接され～」などのように比喩にすると広がりが出る。「しんぎん」「せつな」などは故意にひらがなにして強調しているのだと思うが、呻吟、刹那などの象形文字の方が、イメージが湧く。ひらがなは音声の短歌的伝統が強いが、現代詩は、西欧近代思想の影響があり、明治期に西欧文化概念を漢字で翻訳した多くの熟語は、簡潔に思想を伝えることができる。



渡辺みえこ

わたなべ　みえこ

日本女子大学、文教大学など元大学講師。創作技法論（詩）、日本文学講読。詩誌「いのちの籠」同人。日本現代詩人会、日本詩人クラブ会員。
2009 第59回 H氏賞詩集賞選考委員。
2015 第47回横浜詩人会賞選考委員長。
詩集
『耳』詩学社 1972。『喉』思潮社 1982。『声のない部屋』思潮社 2001。『水の家系』南風プレス 2002。
『空の水没』思潮社 2013（第十回日本詩歌句大賞受賞）。
文芸評論『女のいない死の楽園―供犠の身体三島由紀夫』パンドラカンパニー刊　現代書館発売 1997（第一回女性文化賞受賞）など多数。

佳作

「象と少年」「わが友」　吉井　裕
「新聞配達員」　田中浩司
「黒うろ夢」「バス」「晩秋五色」　北原　満
「母の握り飯」「ふたりの恋路」「出会と別れ」　倉沢辰子
「あくがる」「御破算」「なまずのうた」試金
「アニミズミストの妄想」「ラハイナヌーンの影」　貝塚マナ
「無常の風」　八番目の兎
「ぬけがら」
「命日」「花を冷凍する」「斜陽」　相模　透
「矢車草」　池山弘徳
「南洋通信」「旅立った君の朝」「隠れん坊」上木戸晃
「優しい手」「野の小道」「かけだしの愛」正木ふゆみ
「焼却炉」「キイロのボール」「がたん、ごとん」　すみれ
「辛夷」　西條由美子
「む怒」　七羽鳩子
「おたがい落とし」「ヒトラハヴト」
「すべてをふくらませる歓喜風」　横山　誠
「白昼夢」　田村全子
「悪魔」「彼女に靴を」　橋木正午
「絶対性理論」「地球人の未来」「一休さん」　竹村　啓
「祝魂歌」「0点回帰」　隅田聖美
「夜に埋まる」「雪2019」「天のはからい」渡辺八畳
「雀」「悔恨」「大学教授」　森部英生
「もがきながら」　三浦恵子
「獣と花」「三月十一日」「羽撃く」小山桜子
「蝮の子の唄」「花いちもんめ」　姜　龍一
「悦び」「おぼろ」「薪」　佐藤幹夫
「白骨天使たち」「モノクロよ僕の掌中でなお」　後藤敏斤
「真昼の星」「64G」「潮の礫」　安堂
「銀杏」「悲しみ」「分裂思考」　山下一歩
「空き家」「小さなエリー」
「化け物共の夜―幻覚の記録として―」天ケ谷麗
「恍惚の世界のはじまり」「光」「歯車」めちこ
「無仏蟻紀行」　久利潤保
「魔女のエチュード」「ノロジカ」「嘴」奥間　空
「四季」「殻」　山口たおず
「涙だったかもしれない」「夏の幻」
「透明感を大切に」　てづかかなこ
「永遠」「叢書」「解放」　東風佳子
「風化」「幽し合わせ」「深閑の音」　愛羽　文
「温度」「海」「きれいな円が描けなくて」はんのよしえ

佳作

「見えない笑い」「夜の楽園」「対岸の世界」富田実加子
「虫」　新里　輪
「異臭のことなど」「西南の眺め」
「王の墓に入れるもの」　陸離
「八月」「あめあがり」「月」　悪客しり
「哀願」「春―ダンス」「司祭の告解」藤野　行
「叫び」「夕刻」　高橋蒼太郎
「倒れゆく馬をみた」「いつかまたふりそそぐイヌたちへ」
「追憶を燃やし舟を流す夜に」　帆場蔵人
「腐れ縁」「独立・触れないで」「結合」河合麻衣
「螺旋」「渇き」　十路田道広
「ニセモノ」「ぼろボロ」「凍える焔」絹本ゆい子
「風と雲と会う」「慈悲」
「たてまえ・うしろだて・洞ケ峠」　松藤智会
「川本　舞」「百合が枯れる」
「インスタントラーメン」　睡眠
「海」「ヒマワリ」「憂いの春」　義若ユウスケ
「十月」「空腹」「掌」　五十月彩
「トビアス」「撃つ」「犬」　nostalghia
「夢幻の世界」「垂れるグラス」
「小石を持った少年」　赤津将大
「Yokohama Sight」「Stardust of Yokohama」
「Breakfast with the Slug Reversed」
「Stardust of Yokoh「Breakfast with the Slug Reversed」
鳥ノ海開
「血を流す馬」「湖と旅人」「草叢のドクダミ」
浅見龍之介
「月光」「春風」「神秘」　早見　玲
「郵便」「夕暮れの波間」「秋Ⅱ」　舟橋令偉
「僕らが射ころした猪は」「後悔の舟」
「地の果てまで地割れが、あるいは群体／軍隊としての手振りが」
渡部榮太
「このノート」「花明かり、春風」「彩り」横須賀聖太
「あるてぃめっとどくにんじん」
「ホーム」「イの有様」　あぜ
「保健室難民十七歳」　雪飴さきこ
「漆黒の天空」「野うさぎよ」　井上遠遊
「聖観音―薬師寺」「十二神将―新薬師寺」
清水一美
「敬老会」「レモン1/2」「Winter Night」半田一緒
「膚虜」「湖畔にて」　野崎眞由
「ウィアードランドの詩」「DとRの会話」
「ショートケーキ模様の」　このみのこ
「暮方群小」「夏ひと日」「烏合」　葦刈柑芍

新鮮な顔とベテランと

五十嵐　勉

今回の現代詩賞のトップグループは半分がニューフェイスであり、半分がベテラン組で、いい取り合わせになった。新鮮な顔と実力グループの両方が調和して、全体の色彩バランスが整った。

特に最優秀賞は、内容も形も挑戦的で、現代詩賞にふさわしい野心作となった。ヨクト氏の「きんじ、する」「顔認証訴訟」「飽食した蜘蛛と法悦」は、電脳時代でなければ生まれてこない意欲的な作品である。昨年の柏原宥氏の「デジタルトランスフォーメーション」の詩は、現代の危うさをコンピューター内部の不協和音と不安から告発したが、今年のヨクト氏の詩は、それとは対照的に統計やグラフや解析の外部の歪(いびつ)さから告発している。コンピューター内部から覚える危機は、不安だけが吹き起こるが、この外部の歪みから覚える危機は、もう少し余裕があり、未来への希望も舞っている。ここにあるのはむしろ数字化の危機というべきかもしれない。ヨクト氏は数字ではない何かをしっかり見据えている。「平均への絶えまない堕落」という表現にその根拠がはっきりと示されている。「近似されるまえの／生々しいあのこえはどこへ」という言葉にも、信頼を呼び戻そうとする衝動がある。ただ、歌い舞っているそれは、果たして真の懐疑と告発に繋がっているのだろうか、浅いところで留まっていないだろうか、という危惧は湧く。微妙に切っ先の浅さも感じる。今後どのように発展していくか、期待を込めての最優秀賞である。

優秀賞は今回四人で、まずベテラン組から触れていこう。麻生ゆり氏は連続七回の奨励賞受賞者で、最近特に詩想に深まりが見え、私は三年ほど前から優秀賞に価すると思っていたが、もう一人の選考委員の認識が低く、不運が続いていた。今回はさらに、内容も深まり、技術も洗練されて、豊かなものになった。実力を発揮しての受賞である。心から祝意を贈りたい。ただ、少し気になるのは、「終」「老」「死」と、あの世への三連発のようなタイトルの並べ方で、希望とは逆の方向へ著しく傾いていることである。これだけの詩を作るのなら、未来の方向へも力強く踏み出せるはずである。次回はそれを期待したい。

中原賢治氏も応募歴は長く二度目の優秀賞である。この詩の言葉は平明で、捏(こ)ねた表現や難しい言葉遣いは何もない。現代詩の手法とはむしろかけ離れた様相を呈している。しかし、今回はその平明な言葉の中に、深く迫る思いがあった。「人のしまつ」は老いて捨てなければならない者への痛切な哀感に満ちている。万難を乗り越えて生きてきた者の、命を守り通してくれた者の、その深い恩の海をも捨

てなければならない訣別は、命の宿命として胸を撃ってくる。もっと完成度を高めれば、さらにすごい結晶となったかもしれないという希望を伴っての受賞である。

ニューフェイスの一人は橘いずみ氏で、それほど難しい言葉は使っていないのだが、逆にそのシンプルな言葉遣いの奥に、ハッとするような鮮烈な煌めきがある。この白色の閃光的表現が、夜明けの清潔な白さのように世界を広げて見せるところが斬新である。こういう妙味は、造ってなかなか出せるものではなく、本来の白い性向を元にしてこそ生み出されるものだろう。この持ち味を大事にしてほしい。変に技巧を得ようとすると逆に消えてしまう、純潔の色がある。

対照的なニューフェイスが妻咲邦香氏である。言葉とイメージの繋がりを飛躍させ、投擲の距離を延ばすことによって詩を膨らませる志向は、鍛えられたかなり高い技巧を見せている。アンバランスさをむしろ跳躍力にするその造形はパッチワークの構成美を重ねていく。それは色彩キュービックとなって、確かに屹立する。しかしどこか空中楼閣や巨大なケーキのように、数日経てば消えてしまう幻想の弱さを帯びてしまっている。また、ところどころ弱い表現が蝶番（ちょうつがい）の接続部分を虚弱にしている。その点、不満があり、もっと腰を据えた建築の強固さが欲しいし、詩そのものへの態度の強さが欲しいが、これからまだ伸びる部分が期待できそうなので、それに賭けた。知と意志の強化を望む。

奨励賞は、個性が咲き乱れている観があって、これも一つの豊饒である。

桐ヶ谷忍氏は何度もこの奨励賞を取っているベテランと言えるが、今回も尖鋭な発想で圧倒される個性を感じた。「きれいな人形の生首が咲く丘で」という出だしがすでに尋常ではない。この恐怖を呼ぶ発想は、日常の生温いヴェールを引き剥がす鋭い刃を備えている。切れ味はあまりに強烈で、すべてを根底から覆す迫力を持っている。ただ、この強烈さが、生温い世界に安住する人たちに拒否される過度な効果をもたらすことも否定できない。桐ヶ谷氏は明らかに才能があるが、この才能はむしろ小説など散文の世界の方が生きるかもしれない。

一橋省吾氏は、その詩の技巧を外界への爆発として最高度に放っている。これは技巧ではあるが、内部に爆発させなければならない必然的なマグマを伴っていて、その力は破壊をも呼びかねない痛切な表現力となって、夜空の壮麗な花火のように散開している。私はこれを評価する。詩とはこういうものであっていい。叫ぶべきものがある。ところどころ月並みな表現も混じっているが、何よりも放つべき内質のマグマを持っている。さらに爆発させて欲しい。この一橋省吾氏の詩は、私は優秀賞でもいいと思った。

入選

「Forever」「花束」「あの子」　有澤かおり
「命の河」「PLEY BACK（ちょっと違う人生）」　諸井博行
「生まれてから」　宇川マル
「心の足跡」「花のはなし」　Rosy
「正しいことは」「walk to smile」「natural sky」　はしのぶしげ
「私にくれ」「セント・エルモの火」「モドキ」　飯干猟作
「足音」「今」　三日月李衣
「嫉妬の灰色の炎」「ダマスクローズの朝露に濡れて」　谷町蛞蝓
「空色茸」「36.5℃」　安田　覚
「風が辿り着く場所」「海辺」　惟村来帆
「寵愛」「よこたわる記憶」「風鈴」　羽鳥結人
「青い歯車」　水沢朱実
「猫」「朝」「死神」　八潮　夏
「煌めく闇」「旱」　上下
「聖ヌヌギ」「暦」「ストーカー」　内山健太
「大群の鳥」「朝早い電話」「感覚の方向」　當島伊織
「デパートがあった風景」「大豆から」「双葉」　松原泰子
「忘却」「愛」「本当の居場所」　静川雅史
「あれよあれよ」「お口の中」
「サンセット　イン　アフリカ」「深い霧の中から」
「ニャンジャ族の女たち」
「杭を打つ」
「朗読のための朝」「午前感覚」「幼年時代」　齋藤圭介
「藍白」「論」　御嵩伊蔵
「キャンディの棒に眼球を」
「ポイ捨てが一人の人間の思考を蝕むなら、それは大罪でしょう」
「僕は舞台に立ちたいんです」　王子真瞳
「魂と重量」「水を通過して」「北へ」　星野瑞紀
「ミメシス」「春の胎児」「洞に棲むヒト」　七まどか
「硝子の糸」「叶えられない祈り」「焼き払う」　高倉麻耶
「黄金の肉、銀の酒」　実川阿仁
「スタートアップ」「ガシャポンと百エン玉」
「消しゴム社会」　小堀弘樹
「人類の退化」「群青の泡」「こめかみに梅の花を」　星埜まひろ
「お前が欲しい」「魔王よ」「恋人の眸」　原氷
「愛の名前」「お菓子くなきゃ」「神社」　無鳴クモ
「基礎力」「普遍」「出発点」　全体俯瞰
「プロフィール」　内山ヒロユキ
「躁鬱ダイナソー」　園ヒビカ
「たねまき」「さやえんどう」「あべっくさやえんどう」
「癖」「青春奉唱」　いまだまりこ
「デリリウム」「繋いだ星座は綻び、微塵に砕かれ海に還る」　石川　新
「器から零れるほどの塵と屑を星に変えたのち、ひとつずつ繋いでは解いてを繰り返し君へ捧ぐ」　かねしろ茉衣

福永十津氏は言葉の構築はハードでいいし、「風の惑星」など、漸増の映像美を利用しての表現も効果を発していていい。ただ、言葉の流れが、ギクシャクしていて、感情の流れをやや阻害している。名詞止めの多用に起因している面もあるが、流れそのものをあまり意識していないところにも原因があるように思える。これを乗り越えて音も詩想も流れるようになると、大きな飛躍が期待できそうである。

野葛間氏は、変わったペンネームで古風な趣を感じさせるが、詩の内容は強烈で、このような冷笑的な眼差しを込める表現は一体何なのか、興味をそそられる。詩に恨みや復讐を込めているかと思うほどの烈しさで、こちらにもグサグサ突き刺さってくるだけに、呪い人形のような世界さえ感じる。しかしそれによって響いてくるものは確かに響いてくるので、詩としての曲は伝わってくる。「殴る、蹴るの暴行」などというタイトルは数千の詩を読んできた私も初めてで、これだけでもインパクトがある。この衝撃性は、桐ヶ谷氏と同じように、一度は散文の表現によってもっと広がりと構築性を持ちそうではある。噴出するべき内部の火山の胎動は感じる。

薬師丸怜央氏は、今回は奨励賞に甘んじた。スケールがやや縮んでいるのと、ぬるい表現が目立つのとで、評価を下げた。「雨音」はよく書けているものの、ここというところの盛り上がりが欠け、やや閉じこもり気味になっている。大胆で広壮な展開が欲しい。

佐藤裕氏の詩は「飛び跳ねる　胴体のない獣」や「上半身を切り取られ／足だけで歩く女がいる」など強烈なイメージを出してくる激しさはいいが、それが収束地点でやや失墜気味になる弱さがある。これをどう盛り上げて全体の昂揚に結び付けていくかが課題となる。

遠藤芳子は今回も愛息の死をモチーフに高らかな永訣を歌いあげている。「また　青葉若葉の季節が」というタイトルは、「青葉若葉」が重複気味であるため、結晶感がぬるいが、「緑に染まった光にきみを感じる」という自然への命の溶け込みは共感として普遍性がある。

「入出力波形観測結果」の加藤光哉氏には、原稿用紙一七枚のボリュームといい、その表現の形といい、野心を感じる。その挑戦はいい。このようにして若さをぶつける姿勢は評価する。しかし出だしが安易だったり、途中に宮沢賢治の詩を挿入したりするのは、味消しで、せっかくの挑戦が損なわれる。また理科系の言葉で閉じているところもあり、機械の世界から外へ出て行かない堂々巡りの部分も散見する。これも怒りや疑問を感情に乗せて爆発させる思いとしての流れが必要だろう。

「地下鉄のヘミングウェイ」を書いた松本昂幸氏は、革命や政変の匂いを充満させて歴史を含む劇性があるが、タイトルに「ヘミングウェイ」を持ってきたのは、寄りかかりが見られて、いただけない。この歴史へのアプローチは持ち味には違いないものの、詩としての自我の爆発をどのように入れ込み、どのように融合させるかは、まだ完成の域には達していない。経験してきたものは確かにありそうなので、大風呂敷を広げる方向ではなく、微分の中に結晶の煌めきを敷衍する方向を目指してほしい。

お馴染みになった中村郁恵氏の詩は、今回「動かない水」など着眼の目新しさだけではなく、透明感を擬人化した新たな領域を提示した。これに、風景や静物の触感だけでない、生命のダイナミズムが付与されればもっと大きく詩が動き出すと想われる。過渡期にさしかかっているこれをどう乗り越えて一回り大きくなるか発展が楽しみである。

インバ氏の「虹彩」は、出だしが梶井基次郎の「桜の木の下には屍体が……」をすぐ連想させるので、すでに失敗。既存の作家・詩人に寄りかかるのは厳禁。繰り返しが多いのも作品を弱くする。情熱は強く感じるので、表現を磨いて結晶度を高めることによってもっと詩の華を咲かせて欲しい。漢詩の精髄は志と言われる。私は現代詩にも高度になればなるほどそれが求められると思う。

今回も詩の華花の繚乱を見ることができた。地の苦悩を天上に昇らせ、夜空の華と咲かせ、星の永劫の輝きとして煌めかせるその営為が、さらにこの世に続くことを心から祈りたい。

五十嵐　勉
いがらし　つとむ
1949　山梨県生まれ
79「流謫（るたく）の島」で群像新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞
他に中篇小説集「ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院（ワットプノム）へ」長篇「破壊者たち」戯曲「核の信託」など